

平成 28 年度第 2 回神奈川県総合教育会議議事録

名 称：平成 28 年度第 2 回神奈川県総合教育会議
開 催 日 時：平成 28 年 11 月 22 日（火曜日） 午前 10 時 50 分から 12 時 05 分まで
開 催 場 所：県庁 新庁舎 5 階 第 5 会議室
出 席 者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、高橋勝教育委員会委員、倉橋泰教育委員会委員、具志堅幸司教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員

次回開催予定日：来年度予定

問 合 せ 先：所属、担当者名 政策局政策部総合政策課政策調整グループ 星野春雄
電話番号 (045)210-3056（直通）
ファックス番号 (045)210-8819

経過：

1 開会

平井政策部長：開会にあたりまして、本会議を主催いたします黒岩知事からごあいさつをお願いします。

黒岩知事：本日は大変お忙しい中わざわざお集まりいただきまして誠にありがとうございます。今年の 6 月に開催いたしました第 1 回の会議では、かながわ教育大綱におけますこれまでの取組状況を振り返るとともに、これからの取組みの方向性について皆様から忌憚のないご意見をいただいたところでありました。本日は、第 2 回目の会議となりますけれども、次年度以降に重点的に構すべき教育施策のうち、ともに生きる社会を推進する取組みと人生 100 歳時代における学びの多様性を議題として、皆様と議論を深めたいと思っております。今年の夏に神奈川では大変つらい、悲しい事件を経験いたしました。相模原の津久井やまゆり園で障がい者はいなくなった方がいいのだという大変誤った考えに基づく独善的な犯行によって、大変ショッキングな事件がありました。これによって障がい者の皆さんが大変不安に思っているという声も聞こえてまいりましたので、我々はともに生きる社会を目指すのだというその取組みについては一歩も後退させるわけにはいかないのだ、逆にこの悲しみを力に力強く前進させていきたいのだという思いをこめて、議会の皆さんとともに議論を重ねながら「ともに生きる社会かながわ憲章」を今、皆様のお手元にお配りしていますけれども、こういった文章を取りまとめて、こういった精神を広く県民に浸透させ、そして全国に発信していきたい、そう考えているところであります。こういった問題についても議論させていただきたいと思っております。そして後半では、人生 100 歳時代ということをあえて焦点に当てたいと思っております。神奈川県では、これまで未病を改善しながら、超高齢社会、健康な時代を長くしようという政策に取り組んでまいりましたけれども、その先にある社会がどういった社会かという、100 歳まで生きるのがある種当たり前にもなってくる、そんな時代になるだろうと。1963 年には全国で 153 人が 100 歳以上の方でしたけれども、それが今や 65,000 人になっておりまして、2050 年には 70 万人を突破するという、こういう超高齢

社会が圧倒的に進んでいくわけであります。100年も人生があればですね、それだけ皆さんが元気に過ごしていただけるということを目指しているわけで、そうなればとても幸せだと思うのですが、そうなったときにやはり、人生の送り方そのものを考え直していく必要があるのではないかと考えているということであります。そういった中で、学びといったこともですね、今までの学びという概念とは少し違った形で捉えていく必要があるのかなという気もいたしますので、こういったあたりを、皆さんとともに議論していきたいと思っていますので、皆さんよろしく願いいたします。

2 議事

議題1 ともに生きる社会を推進する取組み

平井政策部長：ここからの議事進行は、知事をお願いをいたします。

黒岩知事：それではまず、「1 ともに生きる社会を推進する取組み」についてであります。事務局から資料の説明をさせます。

○ 山崎政策調整担当課長より資料を説明。

黒岩知事：それではこの件について、ご意見をお願いしたいと思います。

吉田委員いかがでしょうか。

吉田委員：ありがとうございます。僕自身の仕事でも障がい者というのは、本当にいろいろなタイプを持った人たちを扱う仕事をしています。特に、少し場違いかもしれないですけど、統合失調症という病気があって、以前は精神分裂病と言われて、昔はもっとひどい言葉で表現されていました。このことに関して、社会の理解がされていないということに一番不幸に感じた。呉秀三というものすごく偉い先生がいて、患者さんがこの病気になったことは悲しい、つらい。だけど、この病気を理解してくれないこの国に生まれたことをもっと憂うという言葉を残している。だから障がい者とか、あるいはいろいろなハンディキャップの方々にもきちんと理解して、そういった環境を作ってあげることが非常に急務だと思っています。というのは、やまゆり事件が起こった後、大口病院の事件が起きました。あれも必ずしも犯人が捕まったわけではないでしょうけども、やはり、お年寄り、こんな寝たきりの人たちはいらないのだから発想があったやに聞くこともあって、その辺のところもきちんと対応していかなければいけない。それには、医学のみならず、倫理、哲学、いろいろな学問からもアプローチすべきだと思うし、その時点で生命の大切さ、そして人間の尊厳等もきちんと小さい頃から理解していく教育が必要であると思うことと、そうはいうけれども、実際いろいろしていたり、実際いろいろ接している中で、そういったことにストレスを感じることもあると思います。そういったときのストレスケアとか、あるいはこっちが一生懸命やっているのにうまく応えてくれないとか、障害に理解を持っていろいろ接しているけど、なかなかこっちの気持ちや伝わらないといったときの、怒りのコントロール、アンガーマネジメント的な教育を行う必要があると思っています。どうしてもそういったことに対して、小さ

い頃からの教育というのは、皆にいいタイミングで、みんなそれぞれが助け合ってやっていくのだ、そういうことを考えていく。そのような時代になっていくと考えています。

高橋委員：ともに生きる社会を推進する取り組みですが、これまでは、子どものいろいろな歴史を調べてきてですね、戦後はある時期、1970年代くらいまではですね、ヨーロッパ中心の社会でした。ある意味白人中心で、白人は人間だったのだけど、アジア人やアフリカ人や、ラテンアメリカもみんな人間なのだ、中国人も日本人もという。そういう普遍的な人権意識が高まってきた。それが第一段階だと思うのです。そしてさらに1980年代以降、社会が成熟社会になると、互いの違いを認め合う時代になってきたと私は強く感じます。私が子どもの頃の学校教育は、健康で元気で毎日学校に行く子どもというのが、基準的に承認されていて、病気がちだったり、不登校ぎみだったりすると学校に行きづらいという雰囲気があった。そして皆勤賞というものがあつた。今もあるかもしれませんが、あつたのです。健康で丈夫でしっかり勉強するという一つの型があつたと思います。しかし、1980年代、1990年代と社会が成熟してくるに従って、そうではなくて、これは知事も前々からおっしゃっているように、健康と病気の間をスパッと切ることはできない。我々は、何%かの病気の部分をいつも含んで生きているわけです。ただ、これが発病しないのは、いろいろな健康管理ですけど。そういう時代で、多様な人が共存する時代になったなということは思います。学校教育もいろいろな、子どもたちが一緒に生きていくインクルーシブの方向で進んできた。もう1点ですね、やはりともすれば以前の教育は、いのちの感覚は、保健師の担当。あるいは学校医さんの担当。先生はしっかり文化だけ教えればよいという分業体制があつた。しかし、段々、子ども達、大人自身もメンタルな問題を抱えるようになってくると、授業の中でメンタルのケア的なものがすごく大事になってきたと思います。今の子ども達がデリケートになったという問題だけではなくて、社会が複雑化すればするほど、メンタルなものの保障が大事だと感じております。

河野委員：私は産業界で人材育成、組織力向上などを仕事としていますが、今、企業では、ダイバーシティアンドインクルージョンという言葉をつかい、多様な人たちを、今、高橋委員がおっしゃったような、いい意味で活かし合いながら、チームとして力を出していくという時代になっています。ですので、子どものことから、学校教育でも、価値観の醸成がものすごく重要と思っています。ちょっと神奈川県で自画自賛になってしまっていますが、神奈川県は、インクルーシブについては、とても丁寧に、そして数多く、フォーラムをしたり、地元の方と意見交換をしまして、これを他県や都内で話すと驚かれるのです。先駆けているということは課題も多いのかもしれないですけども、障害のある、ないにかかわらず、多様な人たちが認め合う。その認め合う中から新しいものが生まれる。そういう時代に突入したと思っています。例えば、生徒さん達が経験したことは、今ではなく将来、例えば仕事でロボットを作るときなどに昔経験したときの価値観がいきるときもあると思うのです。こういう介護ロボットをつくらうとか。また、発達障がい者にはこう接したらいいのではないかという発想につながる可能性もあります。幼いときの経験は大切だと思います。今年もインクルーシブ教育推進フォーラムは

4回もあるのですけれども、毎回テーマが違って、実は驚いているのは、1回目に会場から声があると、それを生かして2回目、3回目をすぐに改善していくというのもすごいことです。去年も一昨年もそれでやってきているので、こういうことの積み重ねから、神奈川県インクルーシブ教育が社会から認められるようになっていったらいいと考えています。

倉橋委員：変なこと言っちゃうかもしれませんが、まず、ともに生きるというのは、誰と生きるのかということがあると思うのですね。全員と仲良くやれることが一番いいことなのですから。気の合う仲間を探すこと、いろいろなこともすごく大事だと思うのです。障がい者のことでいうと、私は、正直に言って、そういう人たちが自分のクラスにいなかった。身体障がい者の方はいましたけれど。例えば突然叫んで走り回る子がいるということはなかった。そういう人たちがいても当たり前と知らないのですよね。まず知ることから始めなきゃいけないと思うので、インクルーシブ教育というのはすばらしいと思うのです。ただ、それを、今の現実を認めて、どう付き合っていくか。どう考えていくかということも教育だと思いますので、まず知ることから始まる。例えば目に見える障害だけではなくて、見えない障害の方もいっぱいいらっしゃるのです。今こういうストレスの社会ですから、私の経営している会社でも、精神的なストレスで会社に来られない人もいらっしゃるのです。心を痛めているのです。それか、普通にやっているのだけれども、なんか少しおかしいという人もいて、そういうことをまず知ることと、そういう人たちが、普通なのだというようなものを作っていくか。経済誌で読んだだけで恐縮なのですが、ゲームメーカーが通信制の高校を始めた。ゲームだけに特化して、ゲームだけやっているのはオタクなのですが、それは非常に優れていることだと。そういう人たちが集まってやることも、自分が生かされているところだと思いますし、偏見で、通信というのは、昼間の高校に行けないから行くのだからみたいなところがあるのですが、そうではなくて、もっと一歩進んで、そういう特化した人たちの仲間を集めてやる。そういう意味でプログラミングに特化している。それは社会に役に立つことです。早く社会に役に立つことをやる。通信で驚いたのが、非常に学業が優れている人たちが、そこだけで集まって、東大で一番を目指すみたいな、そういうことを掲げられていて、だから、多様性がある中で、いろいろなチャンスがあって、世間、いろいろなものを知ることが大事だし、そこにも仲間がいることを感じてもらうこと。やはり県としては、学校にそういう場を提供するとか。例えば、インストラクターになるような人を提供するとか、入口を作ってやることから始めることがすごく大事なんじゃないかなと思います。自分の母親のことで恐縮なのですが、88歳で、週2回デイケアセンターに行っているのです。そこに行くと、90歳以上の方がたくさんいて、その人たちと麻雀をやったりしているので、ボケないのです。絵を描くことが好きですから、美大の先生も来ていらっやっやっ、いろいろなコメントをしてくれて、それで楽しい。絵を描く人たちとまた仲間になって。その仲間の一人が、94歳といったかな。そのおばあちゃんが、家の都合で、養老院みたいなところに入ったのですが、入った途端に、話相手がなくなって、単にデイケアセンターに来なくなった途端に、この間遊びに行ったら、ボケが始まっていたというのです。

よね。コミュニケーションとか、やることの刺激というのはすごく大事であって、単に形式的に便利だからということではなくて、心のケアはすごく大事だから、いろいろな人とコミュニケーションが取れる機会とかを提供していくことは大事なんじゃないかなと思います。

具志堅委員：オリンピックとパラリンピックという視点から考えましても、以前はパラリンピックの選手は、かつては厚生労働省の管轄でしたけれども、今は文部科学省になっている。これは一つの大きな進歩だろうと捉えています。ただ、実態はどうかと聞いてみますと、パラリンピックの選手たちは、オリンピックの選手が、練習の合間、休憩のときにしかプールが開放されないですとか、あるいはその施設が使えないとか、優先順位が低いという状態になります。そもそもナショナルトレーニングセンターに行くということ自体が、一人では行けない。人の手を借りなければ行けないという選手たちもたくさんいますので、そこは国レベルで支援体制を考えていく必要があるのかなと思うのですね。一方その視点で神奈川の教育を考えてみたときに、インクルーシブ教育の充実が、ともに生きていくという教育の根底になっていくのではないかと。ですから、このインクルーシブ教育を成功させながら、パイロット校がどんどん広がっていくという形を取っていくためには、そういった視点で考えられる教員の育成というのでしょうかね、スクールソーシャルワーカー的な視点を持った教員の育成を、自前でもいいからやっていく必要があるのかなと思います。

桐谷教育長：ともに生きる社会かながわ憲章ができてから、教育委員会、10、11月と教育月間でしたので、様々なイベントを打ってきました。そこで、全てこれを配布し、教育委員の皆さんがあいさつをするときは必ず触れていただく。全公立小・中・高等学校でも配布していると。やはり思うのは、憲章というメッセージを次はどのような形にして県民の皆さんに見えるようにしていくのか。やはりそれは施策だと思うのですね。その施策が現実になっていくと。今、委員の皆さんからインクルーシブ教育という話をいろいろいただきましたけれども、来年の4月には、県立高校3校で、障害のある子ども達が入学してくる。そこに対して、どういう教育をして、その成果を目に見える形で出していくか。メッセージを形に変えて、そして、施策化して、それを現実の場面に映し出していく。メッセージをいろいろなところでPRさせていただいて、そんなことを感じています。

黒岩知事：実はともに生きる社会かながわ憲章を取りまとめるにあたり、いろいろな議論がありました。議論のプロセスはいろいろなことを含んでいると実は感じている。これは結果なのですけどね。最初にあった文章というのは、障害のある人もない人も全ての人のいのちを大切にしますという表現だったのですけどね。実はこの表現、非常に違和感があったのですね。先ほど高橋委員からお話のあった、未病と私は言っているので、グラデーションで考えるべきなのではないかなと。この問題についても、障害のある人と、ない人がいるのかというその捉え方が本当にいいのかなと思っていたのだけれども、最終的にこれは私が言ったわけではないのだけれども、最終的に議論のプロセスの中で、

これは議会とだけではなくて、障がい者の皆さんと、家族の皆さんとか、専門家の方とのやり取りもあったのですが、その表現が消えたのですね。そして私のところに最初にあがってきたのはこういう表現になっていたのです。やはりそうだったのかという気がしたのですね。障害のある人、ない人という、その言い方そのものが、どこか壁を作っているのかなど。障害の完全にないない人なんているのですかということですよ。何ををもって障害というかといったら、近眼だってある種の障害ですよ。老人になって、段々動きもぶくなってきたりとか、足腰が弱くなってきたりすれば、ある種の障害がある。正にグラデーションで進んで行く。そういうことの中でいくなれば、ともに生きる社会ということを考えるためには、自らの障害というものを認めることが大事なのではないかなど。つながっている感じとか、他人事ではないみたいな。私も障害はある。障害のある人、ない人。障害のある人のために、私たち何かしてあげなければいけない、あの人かわいそうだね。私たちは元気だからいいけど、あの人たちはかわいそうだねという。そこに立った瞬間に実は違っているのかなということを思ったときに、僕が一番悩ましいと思っているのは、オリンピック・パラリンピックなのです。オリンピックとパラリンピックが、何が違うかといったら、オリンピックは健常者のスポーツ大会。パラリンピックは障がい者のスポーツ大会。分かれるところの違和感というのをずっと感じているのです。今回あれほどパラリンピックが生中継で全世界に放映されたのは初めてのことなのではないですか。あれほどすごいものなのかという。ランナーは、ものすごいスピードだし、ラグビーなんてすさまじい勢いでぶつかるでしょ。障害のある人はあんな、めちゃめちゃやっちゃいけないと思っている。が一んとぶつかっていきときに、今まで考えているイメージががらっと変わっていく。というときにやはり、オリンピックとパラリンピックの問題がひっかかりながらやっています。

高橋委員：おっしゃるとおり、障害というのはある意味社会が制度的に作ってしまうところがあります。いつも駅の階段を登り降りするときに、朝はささっと行くけれど、帰りはしんどいなと。もし階段の幅が、15センチくらいならいいけど、30センチ、40センチならほぼ全員、障がい者です。つまりあらかじめ入れ物があって、その中に収まってと言われると、知事がおっしゃるとおり、オリンピック、パラリンピックという入れ物になるのです。人間のことを考えると、もっと境界線はファジーになるはずですよ。本当は、制度設計も入れ物を作るときにも階段を低くすれば全員上がることができます。高齢者も幼稚園児もね。そういう制度設計が大事なのだらうなと思います。

河野委員：今、知事がおっしゃったことに共感します。私も2回子どもを産んでいますけども、妊婦はもちろん障がい者ではありませんが、本当に大変なときがあって、人生の中で、まるで障害があるような時期、とっていいかどうかはわかりませんが、誰しもが、不都合、不便なときはありますよね。だから誰にもあるというイメージがとても重要だと思います。たまたま、障害があって、障がい者手帳を持っていても、私たちが人材として見るときは、障害の部分を誰かがサポートしてあげることで、仕事に必要な能力が十分に発揮できたら、それはもう誰も同じだよという感覚を持つことは大切なのではないかなと。学校時代から多様な人が集まる環境で育てていくと、人に対して

いい見方ができるのではないかなど。神奈川県は教室を「みんなの教室」と言っていて、それがすごくいいと思いますね。

吉田委員：学生時代から、学校の頃からというのは非常に大事なことであって、特別支援級の精神科相談というのも十分、何度も繰り返しているのですけれど、お母さんの相談を受けるにあたって多いのは、自分の子どもが障害があつて、電車を乗るとじっとしてられない。歩き回ったり、奇声を発したり。そのときの周りからの奇異なものを見る目。あの視線がものすごくつらいのだ。そういったときに見られるのが本当に悲しいと言って、場合によっては露骨に、自分の子どもくらいちゃんとおとなしくさせないとみんなの迷惑じゃないか的なことを聞こえるように言われたりもするのだというような相談内容が非常に多い気がします。きちんと話を聞いて、苦労を理解してあげて、本当に思いやってあげる。ひとしきり泣いて、案外すっきりして帰る。それというのは、周りに、こういう障害があつてきちんと理解してほしいということがその裏にあると思う。前も一度話したかどうか、カナダのクラスに日本人が留学してきました。その中に少人数のクラスで、障害のある子どもがいるのだ。多少の補助的な教員がいて、そこで、授業を受けていると自分の後ろで、急に奇声を出して歩き回る子がいる。それで、どうしたのだとびくびく怖がっていると、周りの子どもたちが大丈夫だよ、何も怖くないのだよ、いつもだし、何も怖くないのだよ。すぐ落ち着くからねと、周りの生徒たちがいうところにポイントがある。先生が言って、大丈夫だよ、心配しないでくださいよというのではなくて、同級生がそういうふう理解した形でできる。それが一番大事なことであって、今の時代、高校まで別にやっていて、そして高校を超えたら、バリアフリーだといって一緒に生活しなさいと言っても、それは無理な話だと。小さい頃から一緒に生活していて、ああいう子もいる、こういう子もいる。何の心配もないのだ、何もこわくないのだという思いの中で卒業して、自然な形でやっていくことが、自然な形で受け入れられやすい、周囲に理解されやすい。だから、今度のパイロット校のトライアルというのは非常に楽しみで、どれだけ理解してもらえるか。その結果としてどれだけ神奈川が変わっていくのかということ非常に期待しているところです。

具志堅委員：今、吉田委員が言われたことに、本当にもっとも、全面的に賛成しているのですね。心のバリアフリーを作っていく、その根底は教育からしていけないといけないという思いが常にあるのですから、今言ったパイロット校のあり方ということは、いろいろな角度から見て、成功させなければいけないと思っていますので、全力で取り組んでいかなければいけない大きな課題だと思っています。

黒岩知事：教育の中でも高校で、本当は小さいときに自然な形で学び始めて、意識しないぐらいの状況だと一番いいかもしれないですね。

桐谷教育長：今、インクルーシブ教育で、小中学校段階は、「みんなの教室」という言い方で、最初は茅ヶ崎市でやっていますが、今は茅ヶ崎市、寒川町、厚木市、南足柄市の小中学校で、モデル校を進めています。それに合やす形で、その地域の県立高校3校でイ

ンクルーシブのパイロット校を来年度4月に始めていくと。最終的には、県立高校改革の中で、県立高校20校程度までインクルーシブを広めていきます。そうしますと、全県がカバーできると。ですので、まずは、3校のパイロット校で、具体的に子どもが入ってくれば、その子は毎日どうやって勉強しますか、どうやって成長しましたかということが、目に見えますから、成果が問われるかなと。そこが試金石かと思っています。

黒岩知事：小中学校のは、これは増えていくの。

桐谷教育長：そうですね。これから先も基本的に、インクルーシブ教育は全市町村に呼びかけていきますので。

黒岩知事：今は何校。

桐谷教育長：7校。

黒岩知事：全県で。

桐谷教育長：全県です。県立高校は20校、出口のところで作れば、地域の小中学校でインクルーシブ教育を進めていく。今、市町村教育委員会とも完全に方向性を一致させた形で動いていますので。

黒岩知事：障害があるというのが、なんというか、少しサポートすれば、障害の部分、なんの変化もない、同じなのだという、そちらの発想に上手く立てれば。むしろいろいろなパワーを持った人もいらっしゃるの。実は今回の、ともに生きる社会かながわ憲章もですね。新聞広告をいろいろやっていくのですが、その中で、ともに生きるという文字を書いてもらった。ダウン症の書家の金澤翔子さん。まあすばらしい。非常に力強い字をダーと書いてくれた。字を見ても彼女がダウン症だということは全然わからない。そういう環境の下にやられたのにそれだけの力を発揮される。こういうともに生きる社会かながわ憲章の精神にものごく同意して下さって、是非やらせてくださいということで書いてくださったのですがね。

高橋委員：今の教育でいいところはたくさんあるのだけれど、欠けているのは、貧しい時代にあったみんなでやりくりして過ごす知恵。つまり、昔は、家族の中に高齢者もいたし、障がい者もいたわけですが、皆でやりくりしながら生活していくという知恵があったと思うのです。それが、今は、1年生はここ、2年生はここ、健常者はここでと、分けられて、それぞれにニーズという形で、分けられた形で、情報やサービスを受けるという分業体制になっているのが問題があると思うのです。教育ではむしろ、分業になる以前の助け合いというか、コミュニティというか、それぞれの持っているものを出し、ないところは人から助けてもらうという、そういうやりくりをしながら生きていく知恵がとても大事なと思うのです。今朝も地震が起きたのですけれど、地震が

あったらどうするのだと、そういう緊急性のときにサッと動けるような感覚がすごく大事だなと思うのですね。

黒岩知事：インクルーシブ教育が非常に重要な課題だなと改めて実感した次第です。いい形に是非していただきたいと。

議題2 人生100歳時代における学びの多様性

知事：次は、人生100歳時代における学びの多様性についていきます。事務局から説明させます。

○ 山崎政策調整担当課長より資料を説明。

倉橋委員：私も知事が書いた本を読ませていただいて、私は63歳なのですが、この年になっても老後のことなんて考えたことなかったし、そうか100歳までかとなったときに衝撃を受けましたですね。私の祖父は、100歳になって、市から表彰していただいたのですよ。愛媛県今治市だったのですが。そのとき、100歳で、市で一番高齢だったのですね。このグラフを見るとずっと増えていって、今より1桁以上少ないから、なったと思うのですが、私が100歳くらいになる頃には、70万人くらいになっていて、そのうちの一人になっているかわかりませんが、くたばっているかもしれないけど。本当に60歳まで生きていて、あと40年かというすごい衝撃ですね。私の大学の同級生が63歳ですから、大企業に行っている奴が多いので、いい役職につくと60歳定年でなくて、もう3年くらい面倒見てくれるのですね。これからどうするのだみたいところで集まったときにどんな話になるのかなと、この本を読んでもっと考えさせられました。実際63歳は全然元気なのですよね。サザエさんの磯野波平さんて髪の毛1本ひょろっと、あれ54歳なのですよね。定年が55歳でしたからその頃、定年間際のお父さんという感じで60過ぎに見えるのですが。私は10歳くらい上なのだ。その頃は、年金は60歳から支給するという事ですから、たしか平均寿命が54歳くらいだったと思うのですが。その辺のことを考えると、平均より下の人に年金を払うという制度だったと思うのですが、100歳まで生きたら110歳くらいから年金をもらうということを考えていくと、もっと働くということをやらないと充実しないな。逆算してですね。私は、幸い自分で創業していましたから、老後のことも考えていなかったのかもしれないですけど、仕事を打ち切られて、やりたい仕事でなくてもやるのだったら、あるのかもしれないですけど。本当にその部分も含めて、あと40年間年金でなく、稼ぐということを考えてやるということですよ。知事があの本に書かれていましたけど、終活、最後のところからスタートして考えるのだということは、全然やっていなかった。いよいよもって考えなければいけないなと思っているのですよね。読んだ次の日から考えてみようかと。そんな状況ですね。よく言うじゃないですか。成田離婚と言って、仕事ばかりやっていて、定年になったら、あなたの世話はここでおしまいと。要するに、子どもが結婚して巣立ったら女房も逃げていった。いつも仕事をやっていて、なくなると女房のところを付いて回るから、あなた邪魔よ、となって捨てられると。自分もそうなるのかなという、複

雑な感じですよ。少し長くなってすみません。その中で未病ということからも考えると、私も角膜をやられて、目の手術を3回やったのですが。そんなこととか、いろいろな病気、あるいは病気寸前のものと同居してやっているわけですよ。極端なことを言ったら、いつも笑われるのですが、私は、アルコールがすごい好きで、もう少し行くと、お酒なしにはいられなくなるのですが、今のところそこまではないから、ぎりぎりの病気の一番一歩手前の未病でアルコールはありますし、今、ギャンブル依存症の人の感じでいうと、行きすぎると借金をして、となる。行ったりきたりのところにあるというのは、本当におっしゃるとおりで、あらゆることがそうなのですよ。そんな中で、自分はどうしていくかということで、次に行くのですが、取組方が食と運動と社会参加がもっと意味があったのですが、あの本を読んで、お袋の話をさっきさせていただきましたけど、社会に出て行ってやればボケないし、新しい興味も生まれるし、絵を描き始めたのは、70歳を超えてからでしたかね。元々鎌倉彫りをやっていた、好きな人でしたけど。自分の趣味の部分を見つけたり、自分と馬の合う人を探して人生が楽しくなってくるというのがあるので。本当に100歳から逆算して考えていくと、少しおそろしいなと。この月曜日くらいから考え始めました。

河野委員：前回、私はキャリアデザインを仕事とするので、という話の中で、人生設計を90歳くらいまでしか今提示していない、とお話をしたかと思うのですが、今日、その切り口からなのですが。人生100歳時代としたときの学びの多様性なのですが、100歳まで活躍しながら、という切り口があつての学びだろうと思います。例えば自分の学んだことを活かすとなると、そういう場を得ようとして、人とのつながり、コミュニティとか、そこでのコミュニケーションが必要になりますね。そこでまず一つ、場づくりというのはとても大切だろうと思います。今回図書館のテーマ、これがすごくいい場所にかわっていったら、目玉だなと本当に思うのですが、いろいろご配慮をいただいておりますが。図書館は、やはり一般から見ると少し敷居が高いところがあつたのですけれども、とは言え誰もアカデミックな分野に触れることも好きなので、図書館にプラスしてどうしていくかということと、その場で何か創造できれば、新しい価値を見出せる場所になるのかなと。もう一つ、私はキャリア教育の切り口から考えることがありまして、キャリア教育というのは、文部科学省が言ってくるキャリア教育は、もちろん神奈川県は進んでいるのですが、キャリアを狭義で、狭い意味ではなくて、広い意味の広義でキャリアというものを考えると、それは働くだけではなくて、人生そのものになって、生涯にわたる人づくりと教育委員会では言っているのですけれども。広い意味でのキャリアという教育を考えると、各高校でやっている今のキャリア教育を知事がおっしゃる、人生のデザインとして考えた上で、どういう職業を定年まで。知事が教授から言われたという定年の後とかまでも含め、こういうことを考える機会というのが若いうちに必要で、つまり広い意味でのキャリア教育が必要かと。3つ目は先生ばかりに頼るのではなく、一般の社会人がキャリア教育に関わることでまた元気が出てくると思うのですよ。企業に働いている人たちが、すごくいいものを持っているまま定年になる人もいますので、キャリア教育の活用というか、生涯学習との関係というか、そのあたりがこれからキーになってくるのかなと思います。私は、レクチャーなどのタ

イトルではイキイキというときはカタカナで書くのですが、それは、生きるという意味のイキイキと活力の活と両方を意味しているよと説明しています。やはりこれから、長く生きるだけではなくて、生涯活躍、生涯元気という、プロダクティブエイジングという言葉の日頃は使っているのですが、そんな意味合いで、楽しく充実して生きていけるような仕組みを県ができるといいなと感じています。

高橋委員：今、河野委員がおっしゃったイキイキ生きることはとても大事だと思っていて、英語ですと命でも生活でもイキイキもライブリーとかライフという中にいろいろな意味が含まれているのですね。日本語は、命、生活、イキイキと別々の言葉を使ってしまうのですよ。すると、これらは一体だっということがわからなくなってくるのですね。私は、自分自身がやってきた研究が、生の哲学が一番根っこにあるのですね。やはり高齢化社会を生きる上で、一番大事なことは、健康か病気か、それも大事だけれども、それを乗り切るイキイキさかなと思うのですね。それは、知事も本の中で書いていらっしゃいました。お父様の例でね。病気を治すのじゃなくて、イキイキ生きるということの方に主眼を置いていたということなのですね。私は、ちょうど、先週の土日に放送大学で集中講義を2日間行ったのですが、放送大学というのは、ご存知のように、高校を卒業したけれど、大学には行かなかった人が来て、現在社会人の人もいれば、あるいは不登校ぎみの人もいれば、あるいは定年後の人もいて、18歳から70代まで様々な人が50人くらい私の授業を受けています。意見を聞くと、ほんと様々なものだけど、意外と大学で教えるとかかなり学問的な議論になるのです。そこではですね、例えば今の子どもの問題をどう考えますかという、みんな自分の生活に応じて、自分の子どもがとか、何々ちゃんが、と自分の生活に密着した議論をするのですね。これからの生涯学習を含めて、第三者的な研究よりも、やはり私とあなたという、そういう生活社会の中で密着した勉強をしたいのだろうなと思います。私は、今日、参考資料の中に、短い文章を入れてもらったのですが、ライフという言葉は、命もあるけど、その上に、イキイキを訳すと「生感情」、おそらく東洋思想で言えば「気」というのですね。ドイツの哲学のボルノーという人がそれを、「気分」と言ったのですが、ヨーロッパ的に気分というとまた違うのだけれども、そういう気分や気は人を支えているのじゃないかとずっと思ってきて、特に生涯学習ではそういう面が強いですね。日本の子ども達は、学力はすごく高いのだけれども元気がないといつも思っているのですね。力がいっぱいあるのだったらもっと挑戦できるような、それこそイキイキさや元気をサポートしたいなと、社会全体でそれができればいいなと思っています。

吉田委員：未病という言葉自体は、10数年前から聞いていて、僕なりに理解したつもりでいます。それが段々と社会に認められるようになって、認知症の世界では、軽度認知障害と表現されている。認知症ではないけれども、正常ではないのだ。これがまさしくその発想として受け入れられ始めたのが僕が思っているくらいで。ああいった形でどんどん広がっていくとありがたいし、知事の本を読んで、お年寄りの、大人の、子どもでもあるのですが、案外、いじめや不登校と考えたときだって、未病的な発想からすれば、まだいじめではないよ、まだ不登校にはなっていないよと、この前段階あたりで、注意す

ればいろいろな対策をすることもできるのじゃないかという発想を持ったのと。それとお年寄りに戻すと。医者が認知症の患者さん、アルツハイマーの患者さんをいろいろ診て、効かないとは言わないけど、患者さんのクオリティをしっかりとさせるのは、他職種なのですよ。医者だけではない、看護師、理学療法、音楽療法、いろいろなものが加わって、あのイキイキとした表情を作るのは、我々がいくら薬飲ませたって、注射したって、あんな表情は作れない。病院機能評価とって、いろいろな病院の機能評価に行くのですけれども、そうするといろいろな項目があります。こういったことをちゃんとやっているか、作業療法をやっているか、計画を立ててやっているか。でもそんなこと以前に、行って入院している患者さん、利用者さんの表情を見れば、この施設やこの病院がどのような接し方をしているのか感じるどころ。私はそっちの方をもっと大事にしたいと思う。それは、社会で支えながら、みんな関わっていると、そういうイメージがあります。少し極端な例ですけど、やはり今自殺者というのが今ものすごく多いです。減ったとはいうものの、それは働く企業戦士のうつ病対策で減っている。子ども達の自殺と、お年寄りの、高齢者の自殺はまだまだ減っていないという現状があります。お年寄り、高齢者の自殺はどんな人が自殺しているののこのを見てみると、きっと夫に先立たれ、妻に先立たれて一人暮らしで、ずっと寂しい生活をやっている人たちかと思うと、そうでなくても、95%までは家族と生活している人たちなのですよ。じゃあそれが、家族と一緒に生活している人が、何がどうなっているかという、その中で、この障害に対する、ともに生きる社会に戻るのですけど、家族から理解されていない。つまり一緒にご飯を食べていると孫か息子が、じいちゃん、ばあちゃんがくちやくちややってこぼして、汚い。そういうような言葉があって、きっと食事の時間から離れて、離れて冷たくなった食事をしている。同じ屋根の下に住んで外から見ると幸せそうに見えるかもしれないけど、心理的にはものすごい孤独になっている。そして、それで満足している状態があって、そんなことではなくて、家族といえようが、一人暮らしであろうが、地域のリハビリテーションとか、地域のデイケアとか、みんなと笑ったり、麻雀でもいいでしょうし、絵を描いてもいいし、カラオケでも結構。いろいろなことをやりながら、生活するということが更にイキイキ。そして、その中で確かに役割を与えるのですよ。今日の司会は誰よ、今日のしきりは誰よ。というような形で、順番守らないと誰が注意するとか、いろいろな形の役割を与えることによって、さらにアクティビティが上がっていく。これは、知事もよくご存知の日野原先生というのは、日本音楽療法学会で、僕は理事仲間と一緒に話をするのですが、そういった音楽を使ってでも、いろいろな役割を与えてアクティビティを上げていくというのは、非常に役割があって、そして、質の部分として、単に寝たきりで長生きしたのじゃないのだ、元気でいろいろなことができるのだという方向に持っていくということが、ますます求められる時代。医者だけではなくて、他職種が、関与してやっていかなければいけない時代だと思っています。

具志堅委員：私は、現役時代にですね。優勝インタビューから考えて、練習していたのですね。知事の本を拝読させてもらって、私の人生 100 歳から計算しているかという、していないのですよ。これは良くないなと思わしてね。100 歳から人生を設計していくのに何があったら幸せかという、知事がよく提案されています、食、運動、社会参加。

この三つが、具体的に広まっていけば、逆に 100 歳からイメージしやすくなるのではないかと、これは感想ですけど、思いました。例えば私が、吉田委員のところに行って、診察受けて、血圧検査をしてもらいますと、数値が出ますよね。吉田委員が私の結果に対して薬を処方します。でも運動処方はないのですよね。これが例えば吉田委員のところに行って、薬の処方とともに、横に行けば運動処方をして、あなたはコレステロールが高いですから少し運動をしましょうね。1日何歩歩きましょうというような、1か月したら、またその結果をどうでしょうかという、運動処方と吉田委員との連携というのがあれば、医療費の削減にだってなるんじゃないかと。是非そんな社会が実現できれば、いいかなと知事の本を拝読させていただいて、そんなことを感じました。

桐谷教育長：今、高齢者の居場所の問題というのは、これから出てくるのだろうなど。行政的に考えれば、やはり社会教育施設は、これは市町村も含めて、これが一つの居場所なのだろうなど。そこを整理していくということは、たぶんこれから問題になってくる。ただ、図書館は、河野委員がおっしゃられたように、図書館が図書館としてだけの機能でいいのか。これからは、全体に資源が縮小していくということを考えたときに、今ある資源を図書館という機能と同時にほかのいろいろな人が集まれる機能とか、そういう形で資源を大事に使っていくということが求められていくのだろうと。そのときに、じゃあ学校という地域に根ざした施設はありますよと。じゃあその学校というものをこれからどうやって、学校教育だけでもなくても、使っていけるような、地域の資源として、コミュニティの核として使っていく。それが大事なのだろうなど。今は、県立学校でも体育施設とか何かを開放していますけれど、これから先というのは、もう少し進んだ形の、教育委員会としても考えていかなければいけないのかなと。そう感じています。

黒岩知事：今、『ライフ・シフト』という本が出ていて、大ベストセラーなのですが、ロンドンの教授が書いた本なのだけれども、これびっくりするくらい私の本と同じなのですよ、内容が。おこがましいことを言うようだけれども。それで表現としておもしろい表現があったと思うのは、正に 100 歳時代ということなのですね。要するに、ライフのサイクルそのものをシフトしなければいけない。これまでのスリーステージというのは、教育の期間があって、働く期間があって、老後というね。こういう、人生だいたいスリーステージで考えるのが普通だった。ところが、これからは、マルチステージで考えなければ駄目だと。そういう中での時間軸ではなくて、教育だって、若いときに教育を受ける。その後は、企業内教育があるかもしれないけど、働いて老後という。マルチにどこから教育があるかわからないという状況の中で、いろいろな選択肢があって、というのにならないと。100 歳というのはあまりにも長い時間であって、それに対する対応はできないからというようなことが書いてあるのですね。全くその思いは一緒でびっくりしたのですが、やはりそんな時代が来ているのかなといったときにね。そこから考えてみると、教育とはそもそも何なのかということにいくのですよね。小学校のときに算数だ、国語だ、理科、社会だという科目があって、国語なんかはわかりますよね。日本語を覚えなければ、どうしようもないからね。算数というのは、それは計算して、それは生活するには大事だろうなどというのがあるのだけれど。あと小学校がある。中

学校になると、また、それなりに科目が出てきますからね。それで、高校。数学となってきた、逆に数学というのはあれ、なんのためにやってきたのかなという。皆もわからないままやってきたのかなという、つまり組み込まれたそれがあるものだという、やらなければいけないものだという大学に行こうと思った人は大学に行くために勉強しているみたいなことでやってきたのだろうけど、こういう時代になってきたときに、そもそも何を学ぶべきなのかというか。何を本当は教えるべきなのかという、つまり、マルチでいつでも学ぶような発想というのを身に着けるような教育というのが、実は必要なのかなという、気がしているのですよね。ある意味受験というものが一つあっての、高校教育。というのが、どうもあるのじゃないかなと。高校卒業した途端、やった、勉強の時代終わった、というような教育の、実は根本に関わっているようなテーマなのかなと思っています。

高橋委員：1点だけ。明治の頃に education という言葉が日本に入ってきたときに、どう訳すかでいろいろな意見があった。明治政府は例えば、教導という意見が多かった。福沢諭吉は発育、自分で発して育つという発育がいいと言った。だけど、それでは世論がまとまらないというので、それで教導と発育の間を取って、教育になったという経緯があるのですね。だから教育という言葉はいくら検索しても本物の教育は出てこない。むしろやはり education の精神は発育だったのだろうと思うのですよ。ヨーロッパではね。根っこはやはり、自己教育なのですね。自分で自分を創っていく力をどう蓄えていくか。自立した力なのですね。それはなかなか日本の国民性としては、協調性と和を重んじる伝統としては、なかなか難しい。文部科学省も最近ようやくその精神を言っています。生きる力とかアクティブラーニングとか。知事はいつも真逆をおっしゃるので、私はいいと思うのですが、なかなかそれを実践できないもどかしさがありますけど。

黒岩知事：今出た中で、さっきの吉田委員の中でもね、食、運動、社会参加の中でも社会参加が入っているというその重みを最近すごく感じているのですね。これを入れてくれたのは、元厚生労働事務次官の辻哲夫さんですね。彼が千葉県柏市で高齢者のいろいろなモデルを検証した中での結論として、未病を改善する三つの要素の中には、食、運動、社会参加が大事だという話をされたのですね。最初私も聞いたとき、えっと思ったのですけどね。今思うとすごく大事だなと。ずっと老人たちを見てきた中で、フレイルというのは非常にまずいなと。フレイルというのは、虚弱になってきて、歩けなくなってくるとこもりきりになってしまう。こもりきりになって、社会と隔絶しちゃうと、どんどん悪くなると。そういうことがあるので、フレイル対策がすごく大事。そういう話をずっとしてきた中で、食の話も実は出てきて、食とも絡んでいるのだけれど、一番いけないのは、一人で生活していて、フレイルに陥るよりも、家族で住んでいるにもかかわらず、フレイルというか、オーラルフレイルというのに注目しているのですね。食が進まなくなってくると。オーラルフレイルというのは一番危ないのは、一人暮らしではなくて、家族と住んでいるのに。

吉田委員：それが自殺にもつながる。

黒岩知事：そう。それにもかかわらず一人で食べている。その人が、一番オーラルフレイルが進むのだ、その人が、一番虚弱が進むという話を聞いて、今自殺の話を聞いて、正に同じ話だなとびっくりしたのですけどね。そのときに役割を与えるとおっしゃって、正にそのとおりだなと。役に立つという何かのために役に立っているという中で外に出て行くことで、元気になることにつながるというかもしれないですね。これ、教育と絡めていくとまだまだ実は深い話がいっぱいあると思うのですよね。いわゆる学び直しという中でね、人生のマルチステージというか、次なる全く違うキャリアを作っていくこともできるだろうし、こういう時代に対応する元の基礎教育はなんなのかという様々なテーマがあるだろうし、また、これ改めて継続して議論していきたいと思いますね。本日は貴重な意見ありがとうございました。これはしっかり反映させていきたいと思えます。ありがとうございました。事務局に返します。

議題3 その他

平井政策部長：ほかにご発言は。

桐谷教育長：お手元に中学校3年生の皆さんへという形で配らせていただいたものがあるのですが、29年度の入学者選抜に向けての準備ということで、私ども10月に県内の全中学校3年生に配ってマークシートに変わっていきますよというお知らせをしています。同時に12月には実際の回答用紙のサンプル、マークシートがこういうものですよというのを中学校3年生に配っていきたくと思っています。と同時に、マークシートの業者も決まりましたので、これから教員たちに現場で研修をやって、誤りのない形の操作を、シミュレーションも何度もやっていくと。その辺のマニュアルなんかも作っております。最終的には、いかにマークシートを入れたとしても、現場の教員がその部分にどう対応するかが一番大事ですので、校長たちには、これを機会があるときに、ようは、これで大丈夫という実感ができるまで、自分たちでシミュレーションをしてほしいと、トップがこれで大丈夫と思えば、これで大丈夫と。また逐次進行状況を報告させていただきます。誤りのない入学者選抜にするということで、取り組んでまいります。

平井政策部長：次回の会議は来年度を予定しています。具体的な日程・会場につきましては改めて調整をさせていただきますのでよろしくお願ひしたいと思います。以上を持ちまして平成28年度第2回神奈川県総合教育会議を閉会させていただきます。ありがとうございました。

会議資料

- 資料1 ともに生きる社会かながわ憲章
～この悲しみを力に、ともに生きる社会を実現します～
- 資料2 人生100歳時代の設計図
- 参考資料 子どもが生命感覚を回復できる経験を（高橋教育委員提供資料）